INFORMATION



第18回寺子屋トーク
ノストラダムスをぶっ飛ばせ!
～オウム・戒名・ボランティア～

仏教について、お坊さんについて、あなたのご批判、何でも承ります。
時代を震撼させる世紀末の諸相について、伝統仏教の気鋭5人が語り合う、BONZE TALK120分!

7月1日(木)
18:30～21:00

○共　催　教化情報センター21の会
○参加費　1,000円（学生500円）
○ゲスト　梶田　真章（浄土宗系単立・法然院）
'56生まれ。京都の古刹法然院の若き貫主。山内に「法然院森のセンター」を開設、山内でコンサートなど、市民の利用も多い。
清　　史彦（真宗大谷派・瑞興寺）
'52年生まれ。ホストはお坊さん?、ミナミの名所・ボーズバーのオーナー。平野区の街づくりにもかかわる。
杉若　恵亮（日蓮宗・法華寺）
'59年生まれ。市民と語り合う喫茶店説法BONZE CLUBがスタートして15年。テレビ出演も多い。
竹内　純照（天台宗・吉祥院）
'57年生まれ。龍谷大学講師として仏教とインターネットを研究。かたわら地域の障害者支援活動にもかかわる。
高橋　卓志（臨済宗・神宮寺）　コーディネーター
'48年松本市生まれ。チェルノブイリやタイのエイズ・ホスピスへの支援、寺の本堂を使って開かれる「ほてら劇場」「尋常浅間学校」など、お寺を拠点とした活動で知られる。長野県NPOセンター代表。アクセス21代表。主著に「死にぎわのわがまま」

協力事業
マザー・テレサ写真展

去る4月24日（土）～30日（金）に、協力事業のマザー・テレサ写真展が開催されました。

来場された方たちは、ゆっくりと時間をかけて1枚1枚の写真に向き合うことを通して、自分自身を振り返ることができたようでした。設置されていた感想ノートには、「もっと自分と向き合っていこうと思う」というような、一人ひとりの心の声が綴られていました。

期間中の29日（祝）には、マザー・テレサを長年撮り続けてこられたフォトジャーナリストの沖守弘さんによる講演会「20世紀の聖女に学んだ22年」が行われました。会場は立ち見が出るほどの大入りで、沖さんの語るマザー・テレサのエピソードに、みんな熱心に耳を傾けていました。

写真展期間中の来場者は250人にも上り、全国各地から集まった大勢の人たちが、マザー・テレサの精神にふれることができたすばらしいイベントとなりました。

協力事業
気のつどい～現代作家展

去る5月21日（金）～30日（日）には、協力事業として、「気のつどい－現代作家展－」が開催されました。

会員でいらっしゃる関西芸術短期大学教授の坂田明道さんの呼びかけによって集まった、15名の多彩な作家のアーティストの作品に彩られ、應典院は不思議な空間に変わっていました。

作品は、どれもユニークで、壁面だけでなく、天井から吊るしたり、階段を這わせたり、中には床に無造作に敷いて「どうぞ踏んでください」といわんばかりの作品までありました。

いつもと違う應典院の空間に、たまたま足を運んだ人たちも何か不思議なものを感じたようでした。

【新入会員ご紹介】
（1999年6月20日まで）

4月1日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。
○一般会員
【大阪府】
山野上洋子　大阪市天王寺区
吉永久美代　〃
渡辺　和子　〃
関浦　照隆　堺市
会員総数現在237名

サリュ VOL. 14
應典院寺町倶楽部のニュースレター
発行日　1999年6月18日
（偶数月発行）
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1999 JUNE
vol. 14



「自分ともっと向き合おうと思いました……」、マザー・テレサの写真展の感想ノートに書かれていた多くの人たちの声です。心しずかに自己を見つめる、実はとても難しいテーマです。
他者との関係によって、人は自分を知ることができるといいます。平和な日常の中で、他の国々、他の人々に対して無関心になっている私たちはいないでしょうか。仏教は、あらゆる存在が相互につながりあっているという「縁起」という教えを根本思想のひとつとしていました。
人と人が出会い、向き合う、倶楽部の活動がそんなを場になっていけばうれしいです。

EVENT REPORT SPECIAL

時代と個人を見つめつづけて……
初の2夜連続ステージ!!
橋口譲二さんの寺子屋トーク

第16回の寺子屋トークは、5月28日・29日、『写真家・橋口譲二の仕事～時代と個人を見つめつづけて～』と題し、初めての2夜連続で開催しました。写真家の橋口譲二さんをお招きしてのスライドとトークで構成する初めての試み。

1夜めは『「新宿」から「ベルリン」へ』、2夜めは『日本と日本人を知るために』と、橋口さんが見つめ続ける時代と個人について、興味深いお話を伺うことができました。1日目111名、2日目109名、合計230名の参加者。

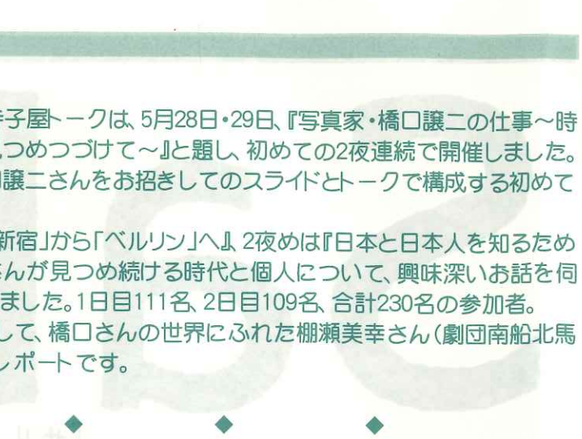
2日間を通して、橋口さんの世界にふれた棚瀬美幸さん(劇団南船北馬一団)によるレポートです。

◆ ◆ ◆

体が反応するままに

5月の28日・29日の2夜にわたり、写真家の橋口譲二さんを招いた第16回寺小屋トーク『写真家・橋口譲二の仕事～時代と個人を見つめつづけて～』が行われました。

1夜めは、『「新宿」から「ベルリン」へ』と題して、橋口さんが80年代に撮られた「視線」、「疾走」、「自由」の写真集に収められた作品をスライドで追った後、80年代におこなった仕事についてのお話を聞かせていただきました。



新宿の街角にたたずむ若者を撮った「視線」に登場するのは、俗にいう"不良"の少年少女です。橋口さんは「"不良"を撮ったというより、何かを発している子たちに体が反応してシャッターを押した」といいます。

この写真集を見た人たちの中には、「不良を賛美するのか」や「不良と決めつけて撮ってどうするんだ」という人もいるそうですが、「賛美でも拒否でもなく、自分の意志で街角に立っていた少年少女がいたということをきちんと認め、その視線の先にあるものを見ていきたい」との橋口さんのことばに、胸をうたれました。

人と人とをつなぐ仕事

相手の存在を認めることは容易な事ではありません。認めるためにはまず相手を知らないとできない。

"愛情"の反対は、"憎しみ"や"嫌悪"ではなく、"無関心"であるといいますが、相手を知るには、時間がいります、興味がいります、根気がいります、そして何より楽でない。しんどい。目を逸らし、既成のモラルや価値観でカテゴライズしてしまう方が断然簡単です。

しかし、そうやって安易に他者の存在を決めつけてしまっていいのでしょうか。

自分の物差しを確認することもなく、杓子定規で計るだけで人と関係が結べるのでしょうか。「今まで目を逸らしてきた人と、彼女、彼らをつなぐ事も仕事のひとつだ」と橋口さんはいわれます。



橋口 譲二
(HASHIGUCHI George)
写真家。1949年鹿児島生まれ。19歳の時上京、日本各地を放浪の後、写真家となる。1981年、路上に集まる若者をとらえた「視線」で第18回太陽賞を受賞、以来一貫して人間の存在を見つめるドキュメントを発表し続けている。
1997年には、寺町倶楽部主催の應典院落慶イベント「橋口譲二写真展・職1991～1995 WORK」を2週間にわたって開催。これがご縁で、寺町倶楽部の特別会員として参加していただく。

日本を水平に切り取る

2夜めは、『日本と日本人を知るために』と題して、90年代に撮影された写真集「17歳」、「Father」、「カップル」、「職 1991～1995WORK」、「夢」のスライドを、写真に添えているコメントの朗読とともに見せていただきました。

スライドの終わりで分かるのですが、朗読をしているのは、「17歳」の中に出ている現在29歳の方でした。

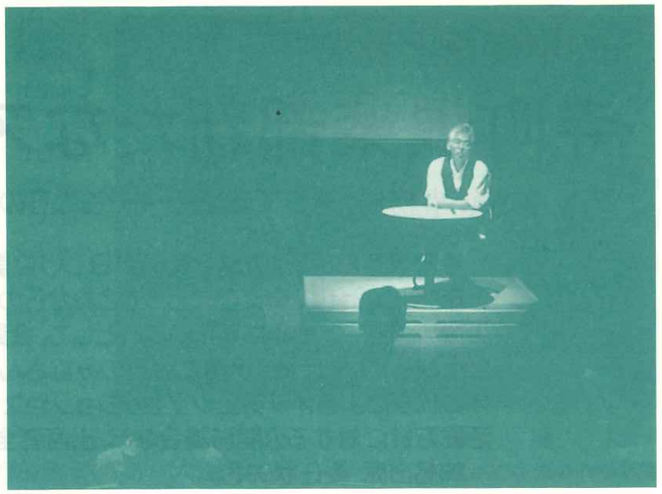
写真の中を飛び出し、私たちの目の前に現れた「17歳」に、私たち観客は時間の重みや力を感じ、また変わらず流れ続ける時間の存在を意識せざるを得ませんでした。

橋口さんは、合計5作品でこの日"本人"シリーズを完結させています。これは、「自分自身が現在生きている時代と空間を切り取り、日本の原風景を記録すると同時に確認していく作業」であったといいます。

このシリーズでは、日本各地を旅しながら出会った人をフィルムに収め、「撮らせてもらった以上は一切セレクトを行わず、全員に写真集に登場してもらっている」とのこと。

「社会が一つの方向へ流れていきつつある中、何かひとつの共通項で日本を水平に切り取ることはできないだろうか」と考え、5つの軸で切り取られた"日本と日本人"が収められています。

敢えて均一的にすることで見えてくる違い。違うのはあたり前で、違ってもいい。「大切なのは違いを認識することだ」といいます。



自分を知るために

この2日間を通して一番感じたことは、橋口さんの人(被写体)との距離の取り方です。

相手に真正面から向き合うということは、並大抵ではできません。とても労力を要することです。人を知ろうとすれば、自分も証していかなければ関係は築けない。傷つけることも、傷つけられることもできる距離で初めて見えるものがある。

3年前、大学の集中講義で橋口さんの授業を受けたことがあります。その時、自分が「現代」を感じる写真を撮るという課題が出されました。

同じ受講生が撮った写真に、階段の上から多くの学生がたむろしているものがあり、それを見た橋口さんは「これは頭のいい人の距離だ。傷つけ傷つけられることもない」といわれたのが印象的で、よく覚えています。



自分はどんな距離で人とかかわっているのだろうか。「自分を知るために相手を知ろう」と橋口さんがいわれましたが、どこにいて、どのように生きているのか自分の座標軸を知り、相手の座標軸を探す。そして、自分の価値基準の物差しを作りつづける。そんな終わらない作業のなかで"今"を感じ、"今"を生きているのだなと、改めて感じました。

最後に、橋口さんに應典院に印象を訊ねたところ、気持ちの場所として"空"があるとおっしゃいました。

ここには、必要なものだけで埋め尽くされた中では見えないものが、"空"のある場所では見え、感じることができる。そんな"空"の空間の中で、橋口さんと出会えたことは、何よりの幸せでした。

(文:棚瀬美幸)

2日間のアンケートから

◆人と真正面から向き合うのはしんどいけれど、逃げていては何もいいことがないんだ。(30歳・男性)
◆他にない企画で人の温かさがたっぷり。思わず自分を振り返ってしまいました。(女性)
◆橋口さんの"人間"にふれた気がします。何かのことで気が狂いそうになったり、どこかいつも心地よくありたくて、ふっきれていたい感じとか、私にもあります。わからない人にはわからない部分でわかりあえることを発見していきたいです。(20歳・男性)
◆最近逃げてばかりで"私"に向き合っていない。お話を聞いて、悩もうと決めました。ありがとう。(27歳・女性)
◆"人は違っていいんだ"というのは、心にブラインドをおろしているんだ。人は似ているところでつながっている……。考えさせられることばでした。(女性)

'99年度総会報告

寺町倶楽部新たなスタート

会員、事務局、そして市民……、こころの文化を育てよう。

寺町倶楽部3回目の総会を6月1日(火)に開催しました。

年1回の総会は、倶楽部にとってこれからの方針を検討する、最も大切な意思決定の機会。そこで、今年は新しい試みとして、会員みなさんのご意見をこれからの運営に反映していこうと、事前に会員のみなさんに総会の要項を送付、またサポート団体の代表によるオープニングセッションやスライドによる2年度の活動報告、今後の活動方針に対する公開討論会など、出席者全員が参加しながら総会となりました。

26名出席、委任状99名。

倶楽部の創る市民文化とは?

総会は午後6時30分に開会。

今年度のサポート団体に決定した、まんまくらぶの柳瀬真佐子さんと蔦田夏さん、夕陽さんさんの会の森田道太郎さんと杉山彰さんをお迎えしてのオープニングセッションでスタート(写真右)。

まずは、それぞれの団体の概要や活動趣旨をご説明いただきました。(両団体のご紹介は7ページ。また、両団体のこれからの活動は、サリュで随時ご紹介していきます)

◆　◆

「お母さん同士の交流の場として、まんまくらぶの輪をひろげていきたい」

「夕陽の美しさを共有することで人と人との絆を深めたい」

「この仕事が私の生きがいです。やりがいのある仕事にめぐり会う幸せを感じています」

◆　◆

活動内容は違えども、人と人とのつながりを大切する両団体に共感を覚えました。

その後、倶楽部とサポート団体がどのような関わりを創っていくのか、という話題に展開しました。

◆　◆

「今はそれぞれの使命をもって活動をいるが、お互いがパートナーシップを結ぶことが大切」

「パートナーシップを結ぶことで、そのカが2倍、3倍となり、新しいプロジェクトがうまれるのではないか」



◆　◆

新しい市民文化、そのイメージはまだ見えないですが、サポート団体、そして市民を巻き込んでの活動が、具体的な形として新たなものを生み出していくことになっていくのではないでしょうか。

活動報告はスライドで

昨年度も、数多くの活動を展開しましたが、その模様を「ビジュアルリポート」と題して、スライドを使用して報告しました(写真右頁下)。

文書では、どうしても結果だけの報告になってしまいがちですが、スライドでその場面をビジュアルに表現することで、参加されなかった方にも、その雰囲気と活動の意義を伝えることができたように思います。

◆　◆

「テーマはすばらしい寺子屋トーク。もっと多くの人に聞いてもらう機会にすべきだ」

「ギリヤーク尼ヶ崎って、こんな踊りをするのか」

「コモンズフェスタには、車いすの人も多く参加したんですね」

◆　◆

サリュでも、その都度事業の報告をしていますが、会員のみなさんに、その催しの意義を感じ取っていただくためにも、結果だけでなく、参加者の声に視点をあてたり、今後の報告の仕方を考える必要があるように感じました。

会員のみなさんのご参加を!

その後、資料に添っての議事を進めました。

田村精造理事長からはあいさつの中で、「会員のみなさんの参加が大切。参加して、初めて倶楽部の活動の意義を感じることができるのでは」と話されました。

3年目を迎え、会員のみなさんの参加、つまり主体的なかかわりこそが、これからの倶楽部の発展を支えていくように思います。

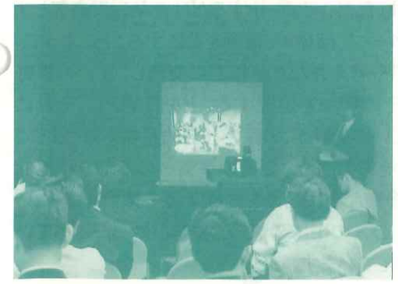
議事は、2年度会計報告、3年度活動方針、事業計画、会計予算、役員改選の検討(詳細については別紙資料をご覧ください)とつづき、3年度の活動事業では、「参加・体験・交流」をテーマに、今年度も様々な活動が展開されることをご確認いただきました。(3年度活動事業の詳細は、6・7ページ)

役員改選では、現役員の方々にはご留任いただき、併せて榛木恵子さんが新たに理事として加わっていただくことになりました。(榛木さんのご紹介は8ページ)

会員と事務局と市民と

総会最後のプログラムは、公開討論会「今後の倶楽部事業を考える」。

各事業に対する計画、反省を事務局内では、事業ごとに行ってはいますが、毎回同じメンバーでの話し合いはどうしても視点が固定化してしまいがちです。



いろいろな視点でのご意見をいただくことで、これからの広がりが見えることを願って、今回の公開討論会を企画しました。

会員同士の交流をかねて、今後の倶楽部の事業について、少人数でのセッションで話し合っていただきました。どのグループも活発に意見交換をされているご様子でした(写真上)。

今までをふりかえってみると、会員同士でありながら、倶楽部の今後について語り合う場面が今までは少なかったのではないか、と事務局でも反省しました。

◆　◆

「出会いを大切に事業を展開してほしい。人が変わるためには出会いが必要だから……」

「設立以来の会員だが、実際に参加するきっかけがなかなかなかった。参加するきっかけづくりを大切にしてほしい」

「会員が参加してたのしいだけで終わるのでは、自己満足の会になってしまう。会員と事務局と市民がどのようにつながっていくのかという大きな視点をもつことが大切」

「事業ベースに走りすぎたことはないのか。事業に走りすぎるがあまり、寺町倶楽部の本来の目的を見失っていないか」

◆　◆

今までの総会では、なかなかお聞きすることのできなかった会員のみなさんの声。厳しいご意見も多くいただきましたが、寺町倶楽部に対するそれぞれのみなさんなりの思いが伝わったきたように感じます。

アンケートや交流会、いろいろな機会を通じて、今までもできるだけ会員のみなさんと事務局の距離を近づけることができれば、と考えてきました。

これからも、継続的に、そして地道に会員交流の場を設けていくこと、またサリュにも会員のみなさんのご意見を掲載する方向で検討したいと考えています。

ぜひ、いろいろな声を事務局にお寄せください。そしていろいろな場にご参加ください。会員のみなさんと共につくる寺町倶楽部です。みなさんのご参加なくして、今後の発展はありません。

会員のみなさんと事務局と、そして市民を巻き込んで、新たに市民文化の発信へ向け、これからも活動を進めていきたいと念じています。

■役員人事(敬称略、※印は新任)

・理事長	田村　精造(賛助会員)	
・副理事長	西島　　宏(一般会員:應典院プロジェクト)	
	三原　敏彰(一般会員:パドマ幼稚園PTA会長)	
・理　事	川口　圭子(一般会員)	
	栗本　智代(法人会員:大阪ガスエネルギー文化研究所)	
	北　達一郎(一般会員)	
	名畑　　孝(一般会員)	
	※榛木　恵子(一般会員)	
	三好　宏明(学生会員)	
	吉﨑　　中(一般会員:應典院プロジェクト)	
・監　査	扇谷　順介(賛助会員:應典院総代)	
	志野　義治(賛助会員:應典院総代)	
・参　与	秋田　光茂(大蓮寺住職)	
	秋田　光彦(賛助会員:應典院住職)	
・事務局長	池野　　亮(應典院プロジェクト)	

「参加・体験・交流」を活動テーマに、新たな市民文化の発信をつづけます！

～3年度活動事業～

3年目を迎えた寺町倶楽部は、会員をはじめ多様な市民や市民団体とかかわりながら、新しい「市民文化」の創造と発信にチャレンジします。教育や福祉、環境、国際理解、芸術文化など、「もうひとつの公共文化」創造に向けて、本会の理念の普及を力づよく押し進めていきます。

主催事業

◆コア事業

・'99年11月2日～14日

コモンズフェスタ'99 日本人の死に方（仮称）

コモンズ・フェスタは、さまざまなジャンルから、個性的なNPOが集結する市民活動フェスティバルです。タイトルのコモンズ・フェスタとは、異なる文化がぶつかって生まれる、出会いとつながりの場。形態を問わず、ゆるやかにテーマを共有しながら、もうひとつの「共」のコミュニティを形成します。本イベントは、99年秋に開催の〈第8回大阪生涯学習フェスティバル〉協賛事業として開催される予定です。

・2000年1月中旬～2月下旬

舞台芸術祭　SPACE区DRAMA2000

舞台芸術祭では、ワークショップや講演会など、広く一般の方に、舞台芸術に参加していただける機会を設定します。中でも、地域の中高生を対象に、参加するアーティストとともに、公演当日だけでなく、稽古や舞台作りを共体験することで、舞台芸術のもつすばらしさを体験してもらえるようなプログラムを考えます。

◆寺子屋トーク

恒例の寺子屋トークは、今年度も多彩なジャンルの講師陣を迎え、「こころ、共生、感動」をテーマに、展開していきます。

・5月28日・29日　写真家・橋口譲二さん
「写真家・橋口譲二の仕事」
・6月11日　東洋大学教授・伊藤隆二さん
「大いなるものに生かされる」
・7月 1日　高橋卓志さん、梶田真章さん他
トークセッション「ノストラダムスをぶっとばせ」
・9月15日　ジャーナリスト、共同通信社編集委員・横川和人さん
「学級崩壊と子ども」
・11月13日　大村英昭さん、塚村真美さん他
トークセッション「日本人の死に方」
※その他、10月、12月、2月に予定しています。

◆市民活動サポート事業

3年目のメイン事業のひとつが市民活動サポート事業です。これは、その組織や規模の大小にとらわれず、自主的に活動を行うグループ、団体をサポートしようというものです。ただしサポートするだけでなく、倶楽部とサポートグループ、団体が、活動を共にすることによって、その発想や考え方などが相互に交流し、互いの視野を広め、その意味を追究することを目的とし、それによって、互いの活動がより深い社会的意味を持つように進めていきます。また、会員の事業への参加を積極的に進め、多様な市民活動を知る、わかる機会を提供し、それぞれの人の中での気づきや学びにつながっていけばと考えています。

◆交流事業

・定期交流会

8月 6日（金）　納涼会
12月26日（日）　忘年会
4月　夜桜会

・その他

サロンコンサートや学習会、ハイキングなど、随時交流イベントを実施、また主催事業の交流会にも参加していただけるよう場を設定します。

共催事業

会員が定期的に参加できる機会として、他団体と協力し、講座事業等を企画します。他団体と協力を深めることにより、事業の広がり、活性化を目指します。

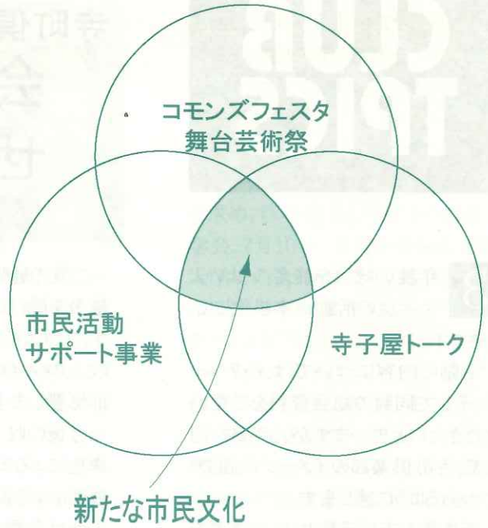
現在具体的な事業は決まっていませんが、講座事業を考えたいと思っています。

広報事業

①広報誌サリュの発行（年6回）
②年次報告書の発行（7月）
③各主催事業の広報宣伝活動

協力事業

①5月21日～30日…気の集い「アート祭」
②9月25日…JOCSフェスティバル



市民活動サポート事業いよいよスタート～サポート団体の横顔

今年度のメイン事業のひとつである市民活動サポート事業がいよいよ始まりました。

今年度サポートする団体は2つ。「関西こども文化協会・まんまくらぶ」と「夕陽さんさんの会」です。

この2つのサポート団体をご紹介します。

「夕陽さんさん（SUNSUN）の会」

大阪の夕陽の美しさをアピールしようというきっかけで、昨年の2月に結成された「夕陽さんさんの会」。

会の運営は、すべて市民レベルのボランティア活動でまかなわれており、「夕陽」のもつ魅力、伝承、イメージなどを再確認することで、人と人、人と動物・自然との共生など、社会生活の営みを見直すことなどをテーマに活動されています。

●

【設立年月】
1998年2月
【会員数】
30名
【これまでの主な活動】
・山折哲雄さん（白鳳女子短期大学学長）講演会「夕陽と日本人」
・夕陽丘界隈散策と高口恭行さん（一心寺住職）講演
・「夕陽」をテーマにした絵手紙と一行詩公募

「関西こども文化協会　まんまくらぶ」

関西こども文化協会は、「子どもの権利条約」を推進するため、サマーキャンプをはじめ、教育シンポジウム、教育講演会、ワークショップなどを企画、実施しているNPOです。会員は、小学生以上の子どもとその保護者が対象です。

関西こども文化協会で、会員から自発的にうまれたのが「まんまくらぶ」です。まんまくらぶは、就学前の親子を対象に、「こどももおとなもゆっくりとありのままに」をキャッチフレーズに、おかあさん、おとうさんが子育てについて自由に語り合い、交流できる場づくりを行っています。

●

【設立年月】
1999年4月
【会員数】
大人17名、子ども15名
【これまでの主な活動】
・市原悟子さん（アトム共同保育所所長代理）発足記念講演会
・お母さん同士の交流会（月1回）
・会報「まんまニュース」の発行
・親子遠足

CLUB TPICS

寺町倶楽部を支える
会員継続手続きをぜひお願いします!!

3年度の総会を終え、いよいよ今年度の活動が本格化していきます。

活動の内容については、6・7ページ、そして同封の総会資料をご覧いただきたいと思いますが、3年目を迎えて、寺町倶楽部のイメージが固まりつつあるように感じます。

新事業の市民活動サポート事業を始め、コモンズ・フェスタ'99、舞台芸術祭2000、寺子屋トーク……、それらの事業を通じて、倶楽部の活動の目的を固めていきたいと思います。

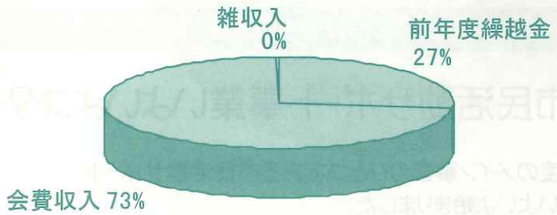
総会のご案内に添付した資料には、支出の内訳を掲載しましたが、右記に収入の内訳を掲載しました。(平成10年度決算額による)

ご覧の通り、全収入のうち前年度繰越金を除けば、100%が会費収入です。ですから、会員の減少による会費収入のマイナスは、倶楽部の活動に即影響します。

今後の収入源の確保は、事業の効率化による支出の抑制、講座事業の展開による収入を考えていきますが、当面は会費収入に頼らざるを得ない状況が続きます。

今回、5~8月に更新となる会員みなさんには、会員継続のお願いと振込用紙を添付させていただきました。

倶楽部の活動を支えるのは、会員お一人お一人の会費です。ぜひ、ご継続をお願いします。また、ご知己の方にも寺町倶楽部の活動をご紹介いただき、会員のお勧めをしていただきますようお願いします。



VOICE ボイス

今回のVOICEは、榛木恵子さん。榛木さんは、JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)の事務局に長年携わってこられ、今年の5月からは関西NGO協議会の事務局長として、関西の28団体のNGOによるネットワークの強化に取り組んでいらっしゃいます。



私は、寺町倶楽部の会員としては新顔ですが、應典院には、講演に呼んでもらったり、関西NGO大学で秋田さんがアピールしていらしたので、以前から知っていました。

私自身はキリスト教の宗教者ですが、應典院の自分たちの基地から社会へ問いかけていくというスタンスは、もう「お寺」というものを超越したところにあると思います。

寺町倶楽部については、「NPO」「大阪市の南の方」「地域」というキーワードから着目しました。

私は生野の出身ですから、自分の暮らすミナミの地域でNPO活動をしてみようと思ったことが、一つのきっかけでもあります。

昨年5月、寺町倶楽部の協賛で、JOCSフェスティバル'98を開催しました。初めて今までやっていたものとは全く違う発想で企画を練り、若い人たちや国際協力について何も知らない人たちにも来てもらえるという、ユニークな形のお祭りを行うことができました。

今年も、9月25日(土)に、また寺町倶楽部の協賛ということで開催しますので、よろしくお願いします。

会員として今後、寺町倶楽部に期待することは、大阪の南の方の地域に住んでいる人たちが、應典院という場を使って、集うことによって、今までになかった何か違ったものにふれることができるような活動をすすめていくことです。

「違う」ことによって、そこから新しいコミュニケーションが生まれることが大切だと思います。

先日、應典院に集ってこられる人たちを見て、ここには秘めたるマンパワーがあると感じました。それが、キラキラ輝いていけばいいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

應典院の2階から眺める生玉の緑は、ちょうどいまが絶景。新緑の季節ともなると、緑のゆたかさが日に日にふくらんでいくようすが手にとるようです。

このあたりの緑は、そもそも弥生時代から続く、大阪では希有な自然林のひとつ。それと生国魂神社の石垣、大蓮寺の墓地群が、都心とは思えない不思議な異界をかたどっています。

時計を止めて、この光景と向き合いながら、私の「いま」を深呼吸してみる—数々のイベントに彩られるなか、ふと静寂が訪れるとき、ここは「いのち」を感じさせてくれる、もうひとつの対話の場所となります。

◆ ◆

夏の應典院は企画の縁日

今年も燃える夏到来。その先陣を切って、イベント・文化仕掛人学校が主催の「企画発表市」が、来る7月22・23日の両日、應典院全域で開催されます。この学校、雑誌「上方芸能」創刊30周年記念事業として設立、その第1期生100人による関西初のプレゼンテーション大会となります。

何がどうなるやら、よくわからんところもありますが、應典院も全面的に応援、22日の10:30 からは、シンポジウム「文化をプロデュースするとは」にぼくも出演します。ゲストは、「上方芸能」代表の木津川計さん、トリイホールの大谷燠さんほか。いずれも入場は無料です。

ハンブルグから見学団来山

ドイツのハンブルグと大阪の友好都市記念10周年記念として、「大阪・ハンブルクまちづくり交流シンポジウム」が大阪国際交流センターで開催、その合間を縫って、一行12人が應典院を訪問しました。



オッテンゼン地域資料館フォン・デュッカー館長をはじめ、都市計画家、教員、アーチストなどまちづくりにかかわる気鋭の面々。住職を囲んで、芸術と街づくり、日本人と宗教といった話題で意見を交換しました。この日のナビゲーターは、寺町倶楽部の会員でもある、大阪外大助教授の森栗茂一さん。

英国からいじめと演劇のWS

6月30日、18:30から英国の演劇教育家アンディ・ヒクソンさんを招いて、「身体を通して民族差別を考える」のワークショップを行います。

この企画は実行委員会と應典院が共催するもの。コーディネーターはヒューライツ大阪の朴君愛さん、ゲストは小説家の金真須美さん。人権教育における演劇ワークショップの可能性に出会ういい機会となりそうです。

○参加1000円。

○TEL 6972−1044 花立。

ボランティア学会で発表

住職が第2回日本ボランティア学会の大舞台で、應典院の取り組みを発表します。

日本ボランティア学会は、ボランティアから生まれる新しい知の確立を求め、昨年発会したばかりの若い学会。7月10日、奈良の帝塚山短期大学での第2回学会で、播磨靖夫たんぽぽの家理事長のコーディネーターによる「生命を支えるネットワーク—共同性の再生」のセッションに、他のゲストとともに参加します。

「寺院文化とボランティアの接点を発題してほしい」との要請は、住職にはとりわけ感無量のものがあるとか。

トークサロンにいらっしゃい

友だち探しのトークサロン、7月と9月の予定は下記の通りです。8月はお休みです。いずれも19時〜。

○7月14日(水)／9月8日(水)

久々に念仏会をやります。

お盆、お彼岸を前に、住職といっしょに念仏会をお勤めします。仏教のお話とお念仏の集いです。初心者歓迎。お友だちとどうぞ。志納制。

○お盆のつどい／8月 7日(土)

○お彼岸のつどい／9月19日(日)

※いずれも14時〜。要電話予約。

應典院活性化パワー、若い力が集結!

この春に公募していた應典院インターンとして、4月10日から杉原幸恵さんが参加、半年間の研修が開始されました。杉原さんは'76 年生まれの23歳。日本福祉大学卒後、老人保健施設に勤務の経験を持ち、社会福祉士の有資格者です。應典院や倶楽部の活動に参加しながら、現場の研修を積み上げます。

また、4月からは應典院事務局懇談会として、應典院に縁ある若い世代25名が集まって、今後の運営のありかたについて語り合う機会もスタート(写真)、今後ほぼ毎月定期的に開催されていく予定です。



「世代も関心事も違う人たちが集って、應典院や寺町倶楽部の運営について語り合う様子は、とても魅力的に感じます。一人ひとりが自分をいかしたいと思っているパワーってすごいですね」と杉原さん。

應典院活性化に向け集まった若いパワー、大いに期待したいものです。